

「京都の自然はオモシロイ！」

(企画趣旨)

「きょうと生物多様性センター」設立準備のため、昨年度までの3年間、京都府と京都府立大学が共同で京都の生きものに関する様々な資料を集積・整理し、利活用のためのデータベース構築や地図化などに取り組んできました。これらを俯瞰すると、様々な地域や生物系統における類似点や相違点、そして特殊性によって、「京都の自然」の物語が浮かび出てくるようです。これまでの作業を共有し、『なぜ、ここに、その生物が生息しているのか?』を考え、確かめることは、京都自然史学の新たなエッジの発見・創生・展開として、京都の自然の新しい価値と楽しみ方を提供するでしょう。

そこで、京都にとっての生物多様性保全を真正面から捉える契機として、多彩な視点の話題提供者から、「京都の自然」の面白さを知り、学び、共有する機会を設けました。それと同時に、多くの皆様に意見を出していただき、真の生物多様性保全を意識した一歩を踏み出す機会となることを期待しています。また、長年の自然史学の蓄積に新しい解析技術や斬新な探究着眼が会うことを願っています。

司会 佐々木 尚子 (新自然史科学創生センター・京都府立大学生命環境科学研究科)

(開会あいさつ) 10:00~10:10

佐藤 雅彦 京都府立大学新自然史科学創生センター長

湯本 貴和 きょうと生物多様性センター長

(概要と趣旨説明) 10:10~10:25

「様々な生物群のデータベース構築で見えてきたこと」

中嶋 智子 (きょうと生物多様性センター・京都府立大学生命環境科学研究科)

(話題提供) 10:30~12:00

(1) 京都府における巨木の森:アカガシ林とスギ天然林

高原 光 (京都府立大学名誉教授・新自然史科学創生センター)

宮津市杉山および、宮津、舞鶴両市の境界にある宇野が岳周辺に分布するスギ天然林には、直径1から2m以上に及ぶ巨木が数百本分布している。また、京都市右京区片波川源流域のスギ天然林(京都府自然環境保全地域)は直径3から5mの巨大な個体を含んでいる。さらに、京都市左京区の如意ヶ嶽の西に位置する雨社大神から如意ヶ嶽東までの主尾根とそこから南、北へ伸びる支尾根にアカガシの巨木が多数残されている。これらの森林は縄文時代の自然林に由来する貴重な植生である。スギ林、アカガシ林の歴史と現在のこれらの森林の特徴を解説し、さらに市民グループ等による保全活動についても紹介したい。

(2) 京都の淡水魚類分布と新たな分布地発見の可能性

細谷 和海 (近畿大学名誉教授・きょうと生物多様性センター運営協議会副会長)

野生生物の多くは、長い年月をかけ地域特有の環境に適応してきたいわば進化の生き証人です。特に淡水魚類は真水を通してしか移動できないので、それぞれの魚種の分布はそのまま過去の地質的変動をよく反映しています。京都府内の淡水域に生息する魚類の多様性は、おもに琵琶湖淀川水系や由良川など流出方向が異なる河川によって育まれてきました。さらに若狭湾周辺域は、東西南北4つのルーツに由来する系統の接触地帯に想定され、日本列島における“淡水魚類相のへそ”の1つと見なせます。しかし、京都

府内の淡水魚類の分布の詳細については依然として不明な点が多く、既存の資料を整理し、的確な調査研究が望まれます。本講演では京都の淡水魚類が持つ価値を再認識するとともに、新たな分布地発見の可能性について皆さんと一緒に考えてみましょう。

(3) 京都府の地質と植物分布の関連を探る

光田 重幸 (きょうと生物多様性センターアドバイザー・元同志社大学)

京都府では最南部から、プレートテクトニクスの付加体として丹波帯の様々な地層がおおむね南北に並び、丹後半島部では火山性の地層が広く分布する。くわえて中丹方面にかけてはかんらん岩や蛇紋岩を含む舞鶴帯が、亀岡市西部では高槻層群と呼ばれる超丹波帯の海成砂岩が分布し、ともに府下では最古層の地層と呼ばれることもある。京都府自体が南北に長いことを考えると、全国でも稀な「生物分布についての解析適地」といえる。この報告では、個々に事例をあげながら、その関連を探ってみたい。

(質疑応答)

(基調講演) 13:20~14:05

「京都における自然資本と生物相のリンケージ」

中尾 淳 (新自然史科学創生センター・京都府立大学生命環境科学研究科・京都府立植物園)

特定の地域に生息する生物の種類組成すなわち生物相は、気候、地質、地形、土壌などの非生物的な自然資本の組み合わせに依存して特徴的なパターンをもつに至ります。ただし、人の営みは自然資本と生物相とのリンケージを容易かつ急速に変質させ、しばしば復元不可能にします。本講演では京都の自然資本の特徴について地質・地形・土壌を中心に紹介するとともに、生物多様性保全における「未病対策」の重要性について提案します。

(活動事例から学ぶ) 14:10~15:10

(1) 個別の希少種保全をすすめながら空間保全への途をさぐる

西野 護 (雲ヶ畑・足谷 人と自然の会)

北山南部域は、城丹尾根・棧敷ヶ岳などで構成される丹波高地南縁部で桂川・鴨川・清滝川の分水界。チャートや緑色岩など地質条件が生み出す水環境、曲流する峡谷の高湿度環境、冷温帯への移行起点となる森林、日本海要素植物などが多様な種数と生態系を生んできた山域。周辺に里山が点在し景観と文化を継承する。水田・湿地などは希少「水田雑草」の残存場所となる。北山南部域の奥山・里山一体保全が求められるところだが、まずは個別希少種から「幅」「奥行き」「高さ」の生態系空間の保全へ、空間に息づく生物群集の保全への方途を探りたい。保全主体の形成と基盤になる力は何かを考えてみたい。

(2) 「大阪市域生き物調査」:都市だからこそ、人と環境をみつめて

— 網羅的継続的な実態把握とデータ蓄積

梶元 慶子 (大阪公立大学・大阪市エコボランティア)

都市で生物多様性保全を考える意味があるのか?と問われたら、「都市だからこそ」と答えます。ごく普通にみられる種でも、外来種であっても、エリアを特定せず網羅的に、そして継続的に記録することで、都市における人為的な環境による影響を知ることができます。学ぶだけ楽しむだけの観察会では得られない、市民による綿密な生き物調査によるエビデンスを公開することは、広く市民の視座を高めるきっかけとなるでしょう。生物多様性保全の主流化をめざすための、都市だからこそ取り組みを紹介します。

(意見交換・自由討論) 15:15~16:15

(閉会あいさつ)

中尾 史郎 (新自然史科学創生センター・京都府立大学生命環境科学研究科)

京都府立大学新自然史科学創生センター・きょうと生物多様性センター合同シンポジウム 生物多様性からみる京都学 その1 「京都の自然はオモシロイ！」

(開催日と開催場所)

2023年12月10日(日) 10:00~16:15 (9:30開場予定) 参加無料・事前申込制
京都府立京都学・歴彩館 1階大ホール 先着400名
オンライン同時開催 先着100名

(申込方法)

申込期間：2023年11月1日(水)~11月30日(木)

ホームページ <https://www.pref.kyoto.jp/biodic/index.html> からの申込フォーム、
又は、電話・FAXでお申し込みください。

申込フォームは右QRコードからも入力できます。



電話・FAX申込

メールアドレス(ない場合は電話番号)、申込者氏名、ふりがな
及び参加方法(会場参加・オンライン参加)をお知らせください。

電話：075-222-3951 FAX：075-213-0922 京都市 環境管理課

(会場アクセス) なるべく公共交通機関をご利用ください。

京都府立京都学・歴彩館

電車でお越しの方

京都市営地下鉄・烏丸線

北山駅(K03)(1番、3番出口)南へ徒歩約4分

バスでお越しの方

北山駅前(京都市バス4系統・北8系統)南へ徒歩約4分

府立大学前(京都市バス1系統・204系統・205系統・206系統・

北8系統/京都バス32系統・34系統・35系統・46系統)北へ徒歩約6分

自転車、バイクでお越しの方

下鴨中通側に専用駐輪所がございます。



本シンポジウムについての問い合わせ

きょうと生物多様性センター

<https://www.pref.kyoto.jp/biodic/index.html>

電話：090-4496-3887

メール: contact@kyotobdc.jp

